

大学女子サッカー選手の進路選択に関する研究 ー関東大学女子サッカー連盟所属選手を対象としてー

A Study of the University Women's Football Player's Career Decision

1K05A081

指導教員

主査 原田宗彦先生

小石 絵里子

副査 堀野博幸先生

【緒言】

大学生にとって進路選択は重要な問題である。しかし入社した企業を3年以内に離職する大学新卒者の割合は3割を超えている。離職の原因として企業・仕事と学生のミスマッチなどが考えられ、中でも「仕事が自分に合わない・つまらない」が理由として挙げられていることから、入社後に後悔しない、納得した進路選択をする必要がある。進路選択に関わる個人の力として、進路選択力、進路選択に対する自己効力がある。これらの高まりが職業を決定しない、あるいはできない「職業未決定状態」を抑制し、進路選択行動を変容することが期待されている。

大学生女子サッカー選手の進路選択肢の1つとしてなでしこリーグがあるが、そこでプレーできる者は一握りである。また、引退後の適応がうまくいった選手の多くがスポーツをしながら他のキャリアに対しても関心を向けたり、実際に行動を起こしたりしているという現状があり、なでしこリーグに進むか否かに関わらず、スポーツに傾倒しすぎることなく、現役時代から引退後に向けた準備をしておく必要がある。

【目的】

競技力の高い者はそうでない者と比べ進路選択に対する自己効力が低く、職業未決定状態につながる可能性のある要素を作りやすいため、進路選択が困難であるという仮説の検証を行う。また、競技力の高い者の進路選択時の特徴や問題点、どのような進路選択に対するサポートをして

いるかを明らかにすることである。

【方法】

関東大学女子サッカー連盟に所属する選手321名を対象とし、2008年10月中旬～下旬にアンケート調査を行った。有効回答数は267(有効回答率83.2%)であった。調査項目には競技歴や過去の進路決定に影響した要因などの独自の項目及び「進路選択に対する自己効力尺度」「職業未決定尺度」を用いた。対象選手のうち都道府県選抜以上の経験を持つ者を競技力の高い者と位置付け、そのグループを1、それ以外の者をグループ2と分類した。各質問項目の得点比較のためにSPSSを用いてt検定を行った。

【結果と考察】

進路選択に対する自己効力の単純合計得点にグループ間の有意差は見られなかったが、競技力の高い者の特徴として以下の6つが明らかになった。①過去の進路選択時には部の強さを重視し、勧誘や薦めを重要な選択要因とした②就職を選択肢の1つとして考える者がほとんどであり、なでしこリーグでのプレーを希望する者は少ない③大学卒業後も何かしらの形でサッカーに関わりたいと考えている④望む職業に就けなかった場合や何らかの理由で卒業を延期しなければならない場合、それに対応することなどの、不測の事態への対処に関しての自己効力が低い⑤自分の興味・能力に合うと思われる職業選択に対しての自己効力が高い⑥できれば学歴やツテを利用

してよい職業に就きたいと考えている。①②には部活動やなでしこリーグなどの女子サッカーが置かれている現状が影響している。また、過去の進路決定要因は④～⑥に影響し、大学卒業後の進路選択を困難にする要因となっているのではないかと考えた。

【まとめ】

引退後の問題を選手個人の問題としてしまわずに、選手を取り巻くサポート体制を整える必要

がある。その例として、チーム関係者や学校からの理解やサポート、今まで積み上げてきたスポーツキャリアを有効なものにするための社会的サポート、進路選択に関しての不安要素を低減させるための進路選択に対する自己効力育成のためのサポートが考えられる。

今後は先行研究の更なる検討や、幅広い選手を対象とした、進路選択に対する自己効力尺度と実際の行動との関連性の調査が求められる。